

# 1. 一寸先の藪

……雨がやんだ。やつた。うれしい。天の涙よ、さらば。二度とくん。

あーんん、でもなア。

あーあーあー……んにやあああ……つまらんのう……。

いつつもいつもオ、同じ景色と同じ音オ。

風情とやらには飽き飽きだぜ。もつとさあ、こうさあ、

ババーンっと変わる何かが、目の前に現れたりはしないかね。

……。

変化の兆し、何もなし。

ああ、あああ、栄枯盛衰。えいこせいせい 郡鄕の枕。かんたん まくら

僕の長い長い寿命は、こうして無為に失われてゆくのか。

せめてこの血が涸れるまでに、この空っぽを満たしておくれ。

誰でもいいのだ。誰でも。誰でも……。

お？ お？ おお？

やあやあ待たれい、そこゆく空蝉うつせみ よ！

どこを見ているのだね、こっちだ、こっち。……そうそう。ここだ。

なんだなんだ、君の眼はとても丸いな。元々か？ それとも今だけか？

君は何者だ？ なにゆえ數をひた歩くのだ？

……おお、すまない。僕の名はフコヤブ。フコヤブだ。蛇の妖だ。

……どうした。妖見るのは初めてか？

おおそろかそろか、初めてがこの僕とは、それは何とも光榮だな。

急ぎ足のところすまないが、話し相手になつておくれ。

ちようど退屈していた頃合いでな。

ん？ ああ。なにぶん僕は、ここに数百年もの間、幽閉されているのだよ。

……なんだいその反応はあ？ 僕の言うことが信じられないか？ ふむむ。しかしな君、僕はここに存在している。疑いようもなくここにいる。ほらほら、もつと近くに来たまえ。

なに、取つて喰つたりはしやせんよ。そもそも僕はここから出られぬ。

ん？ なんだ？ 僕の顔に何かついているか？ ハハハ。

……んうー？ おおお、吸い込まれそうな瞳だな。

そしてこのニオイは、うん、やはり君はひとだ。ひとの子だ。

ウフフフ。ン、実によいニオイ。うまそうだな。じゅるりつ。

あつあつ、ちがツ違うつて喰わないって。

うまそうだなつて思つただけだよつ。思うだけなら勝手だろつ？

それに、ほら、僕はここから出られぬ。籠の中の鳥……いや、蛇だ。

ちよつちよまつてホント待つてつて！ ちよ待てよツ！ 待てツ！

ほら見てよ、僕さツ、こんつなどころに閉じ込められて、

なんかこう何もかもボロボロで、もんのすごい哀れだろ！？

お話したいなうとか助けてあげたいなうとか思うだろおふつう！

なつ？ なつ？ つまりお前はここにいるべきだ。ここにいるべきだお前は。

さもなくばアレだぞ、絶対お前今晚寝るとき、枕元にアレだぞ、

「へ」で始まつて「び」で終わるニヨロニヨロした生き物が忍び寄るぞ。

痛いぞお蛇に噛まれると。あ蛇つて言つちやつた。まあいいや。

ともかくだね、この藪の道は危険だからね、ここにいたほうがいい。

なんせこの藪にはだな、夜な夜な不気味な白髪の巨乳美女が現れるという、世にも恐ろしい奇譚があるのだよ。ああ恐ろしや恐ろしや。

……は？ いや僕じやなつて。だつていま寝じやん。

夜のやつと僕は別人です。不審者扱いしないでください。

なんだ君は。さつきから失礼だなまつたく。ふんだ。

いいもん。どうせ僕はここで干からびて死ぬだけの人生ですう。

ひとりやないけど人生なんですう。蛇人生ですう。

……あれ？ なあ。ところで君はなにゆえここに？

よくいるよくいるう。この藪は、なぜだかひとを呼びこむのだよ。

しかしだな、こうして出会えたのも何かの縁だろう。

ゆらりとくつろぎたまえよ。危険とは言つたがね、ここは良いところだ。

何が良いって、ほら、なーんもない。

都の喧騒も、煩わしいご近所づきあいもないのだよ。君と僕だけだ。

ね。お願い。もつとこつち来て。座りなよ。立ちっぱなしは疲れるだろ。

……ふふ。よく見ると君、かわいい顔をしているじゃないか。かーわいー♪

お？ お？ なんだ、照れているのか。なあにもうかわいいなあ、ふふふ。

……やあ、スマンスマン。こうして誰かと語らうのが随分と久しくてな。

ここを通るものは、僕が声を掛けるとな、一日散に消えてしまうのだ。

まったく失礼な話よ。僕はおしゃべりがしたいだけなのに。

お空に神様がいて、人々の願いを叶えるのが役目だつていうなら、

そいつあかなり不人情な輩だね。これっぽっちの望みすら無視するんだから。

……いや、もしかして君が、神様の使いだつたりする？

あはは。まあまあ、僕にとつてはそれだけ……うん。

今日、君が目の前に現れた。僕にとつてはそれだけ……うん。

あ、そうだ！ 喉が渴かないか？

こう暑いとカラカラだろう。ガラガラヘビならぬカラカラヘビ、つってな！

ははは。粗茶だが、これがなかなか良い味でな……つて、なんだ、おい、

やめろ、その軽蔑の眼差しをやめろ。傷つくだろ。こう見えて繊細なんだぞ。

ほら、これぞこの藪の名産品、フコヤブ汁だ。とくと味わえ。

つてなんでそんな嫌そうな顔する！？ なんだ、匂いが気に入らないのか？

……名前？ フコヤブ汁のこと？ なにか問題が……？

いいから飲めつて。ズズツ……。ほら、こんなにおいしい。飲め飲め。

……だろ？ うまいだろ？ ふふ～ん♪

さあてさてさて。親睦も深めたところで、ひとつ尋ねたいのだが。

……君さ、道に迷ったと言つてたろ。

嘘だよね。

## 2. 背後の影が泣いている

ほー。心中言い当てられても、表情を崩さんとは。

君は存外、肝つ玉が据わつているな。

いや、相当な覚悟をもつてここまで来たか。

そもそもね、僕の声が聴こえるならまだしも、

姿形まで見えてしまうというのは、死期が近いことのあらわれだね。

……漸の者なら、見えたり、話したりもできるのだが、

どうも君からは、靈力も何も感じぬ。

そして僕も、煮ようが腐ろうが妖の端くれだ。

この両目に映る君の像は、そうだな……、なにか重なつて見えるぞ。

そのなにかつていうのは、君の背後にいるそれすなわち……死だ。

さながら死の二人羽織。

僕にひとを喰う趣味はない。が、まあ色々あつて、死の匂いには敏感でな。

ひとの子よ。死ぬも生きるも勝手だが、わずかに残つた現世の時。

それ……僕が喰つてしまつても構わんかね？

あ……つまり、死ぬまでの間、ここにいてくれませんかつてことです。

僕は、数え切れぬ日々をここで過ごしてきたが、

君のように自ら死を望む、いわゆる半死半生を見るのは初めてなんだ。

……ああ、意外とね、出くわさぬものだよ。

目の前で、ポン刀振り回して殺し合う輩は幾度となく見てきたが。

ひとは、どれだけ苦しくても、追い詰められても……、

やはり生きていたい生き物なんだと思うよ。性、というやつだね。

……なあ。

君、ずいぶん妙な汗を搔いていないか？

もう身体に回ってきたのかな。びりびり、ぎちぎち、クツクツク♪

先刻、君に飲ませたフコヤブ汁。……可憐な乙女の甘茶だと信じていたのか？

ぼおくを誰だと思っているんだい？ 古来よりひとから畏れられた蛇の妖ぞ？

僕の体液が、ひとの身体に益のあるものだと？ 馬鹿な。

毒とは本来、妖の力だ。

我々が持ち、君たちひとが持たぬ、生物を呪い、死に至らしめる力なんだ。

まあ、そうだなあ。長い時を経て、フコヤブの靈力は地に墮ちた。

君を冒す毒も、四半刻。しばんごく現代風に申せば三十分は要するか。

やがては身動きすらままならぬ。意識は霧へ迷い込む。

全身がフコヤブに支配され、そうして君は……眠るように生を手放すんだ。

ククツ。そして、肉体は消える。毛髪一本すら残らぬ。

でも、構わんだろう？ 君は死を願っているのだから。

自ら死ぬも、僕に殺されるも、等しく目的を達成できるというものではないか。

己を始末する恐怖は、妖もひとも変わらぬ。

崖から身を投げる一歩は、一生のうち一度も使わぬ勇気かもしけぬ。

ならば、この蛇の妖に引導を渡される方が、よほど楽に死ねるというものの。

おまけにその肉体も搔き消えてしまう。あふたーさーびすというやつだよ。

さあどうかな。今の気分は。

ぼんやり陽炎かげろうだつた死が、知らぬ間に目の前にいる。

どれ。手を出してみい。ほら、ほら。僕の手を握つてみろよ。

フフ。効いてる効いてる。確かに毒が回っている。クスツ、いや案ずるな。

死の間際は少し苦しむが、それも現世うつしよの苦しみに比べれば大したものではない。

……んん？ なんだなんだ、死が迫り来ているというのに、

出てきた言葉がそれか？ 僕の体温なんぞ、君に何の関係もないだろう。

……しかし、そうか。僕の手は冷たいか。フフ。そりやあそだ。

君のことを半死半生はんしほんじょうだと揶揄やゆしたが、生きながら自由を奪われた僕も、

似たようなものだつたね。なんたる皮肉かな。

……君なんて、まだ熱いじやないか。生に満ち満ちているような手じやないか。

フフ。そうだなそういうえば、こうして誰かの手を握るなんて、ああそだ、

昔はよくこうしていた。ひとの手を握っていたよ。

……血生臭い思い出だが……。

……おい。

なんでさ、手を離さないのかな。

その顔はなんだ？ 僕に何を求めているんだ？ 解毒か？ そんなものないよ。

妖の力とは、君の思うほど都合よいものではないからね。

しかし僕がこうなつてしまつたのは、もとはと言えば君たちひとのせいだ。

このか細い手が、冰のように冷たい理由……知りたいか？

僕の……フコヤブの軌跡を聴いてくれるかい？

なに、くだらん蛇の小嘶こばなしだ。

死の酔いのつまみに……喰つておくれ……。

### 3. その名は巫蟲數

僕は、この藪に住まう蛇だつた。アオダイショウという蛇だ。

ああ、なにも好きこのんで潜んでいたわけではないよ。

人里に出れば、ひとの子に棒でつかれたり、石を投げられたり、しまいには火遊びのオモチャに使われたりと、散々な目に遭つた。以来ずっとここに籠り生きてきたのだ。

今となつては懐かしいなあ。あの頃は、大層ひとが嫌いだつたよ。

自由気ままに我が物顔で、土地という土地を踏み荒らして回る憎き畜生ども。

だが……うらやましかつたなあ。妬ましかつたなあ。

恨み辛みは、やがて僕に靈力をもたらした。みるみる力が湧いてきた。

ひとに化ける力を手に入れた。だから僕は、最も忌み嫌うひとに化けたんだ。

それがこの姿よ。美しいだろう。艶めかしいだろう。

この淫靡極まりない姿態で、村人を誘い、旅人を誘い、

まんまと化かされた間抜けどもの不味い肉を……喰らいに喰らつた。

やがてこの藪は、人攫いか、妖に喰われる噂でも流れたか、

ひとが寄り付かなくなり、つまらん日々が続いたよ。

そんな折に、……ギットギットに靈力を放つ異形が現れてね。

血走る眼は、もはやひとか妖か区別がつかなかつた。

その輩が、僕の目の前で、……蟲毒の儀をおっぱじめたんだ。

蟲毒を知つてゐるか？ 蟲の毒と書いて蟲毒。毒虫を共食いさせ、

最後に残つた一匹を神靈とし、その毒を用いて誰かを呪つたりと、

まあ、とにかくくでもないことに使われる。

ククク……必死に蟲毒をつくろうとする、その輩の顔がおもしろくてなあ。

そうだ。神靈となつた蟲を、搔つ攫つてやろうと思つたんだ。

ああ、でも……あれほど不味い蟲は他にいないだろうなあ。

神靈を喰つた僕は、この世のものとは思えぬ熱を感じ、力を感じ、

欲望のままに……その呪術師を喰い殺した。

蟲毒はね、巫蟲とも呼ばれるらしいね。

いつしか巫蟲藪と呼ばれるようになつた僕は、

僕が何よりも嫌いなひとの姿のまま、漸と呼ばれる連中……、

すなわち、妖とひと、両者の世界を生きる靈能力者たちだ。

その者たちの手に掛かり、この薄汚い祠に封印されてしまつたというわけ。

めでたしめでたし。

ハアツ……。くだらぬくだらぬ。どこどこまでもくだらんな。

まさしくひと口嘶だ。僕の過去は小嘶の価値すらないものだつた。

そんな虚しく寂しく空っぽな半生を過ごし、あとはもう、

永い永い寿命を、ここでひとり過ごすだけの生涯なんだ。

……あおい、いつまで手え握つてんだ君。そろそろ離せよ。

疲れるだろうが。聞いてんのかコラ。

……は？ いや、ごめんじやないよごめんじや。手え離せつて。

……おい、おい……ちょっと待つて。なに君、もしかして、手じやなくて、

僕をいじめたひとの子たち、呪術師、漸、そいつらの所業を謝つてるつての？

ハハハ。たわけ者め。なんだ、楽な死をもたらした僕への義理立てかい？

……ふうー……。

今だからこそ……言えることだが。

昔の僕は、ただひとの子と遊びたいだけだつた氣がする。

カワズや小鳥を捕らえて、あいつらに差し出せば喜んでくれるかなあなんて、

夢想を抱いて……会いに行つただけだつたんだなあ。

蛇蝎の如く、つていうだろ。まさに僕はその蛇なわけだが。

姿や種族が違うだけで、ただ恐ろしいというだけで……。

僕が何を考え、何を思つて生きていても、この姿を変えない限り、

誰も僕の話を聞いてくれやしないんだ。

……そう思えば、僕がひとの姿に化けたのは、ひとの目を惹く姿に化けたのは、

……憧れが……あつたから、かもね。あーあー……あほらしいね。

……いいよ、許すよ。

君の一言で、なんだか、どうでもよくなつてきた。

いや、待つてたのかな。僕のくだらぬ過去、

くだらぬ独りよがりを聞いてもらうのを。

そして、……君の、その一言を。

初めてだもんない。立ち止まつて、手をつないで、目を向き合つて。

……こんな風に……語り合うなんてき……。

何日も、何十日も、何年も何十年も何百年も僕は、ひとりで。

……ごめん。

いや、君がさ、謝ったから。僕も謝ろうと思つただけ。

さつき、言つたよな。ひとはどれだけ苦しくても、追い詰められても、やはり生きていたいものなんだ、つて。

だのに僕は、君に……毒を盛つてしまつた。

それが分かつてゐるのに、僕は、君を殺そうとした。いや、殺してしまう。

なんて嫌な奴だ。初めて現れた理解者を、あはは、僕はこれから失うのか。

己からにじみ出る毒で、失わせるのか。

なあ、苦しいか？ 手が熱いぞ？ ……ハハ……そうだな、そうだよな。

ああツ……ははツははツ……♪ アハハハツ……ヒヒツおかしツハヒヒツ、

ほんつと、どーしようもねえ、クソツクソくそツクソツ、クソツ畜生ツ畜生ツ、畜生おツ……！

なんだよツ……僕……何やつてんだよ、ううツ、ううううツ……！

……、なあにが……ありがとうだ……。

ほんとは君だつて生きていたいんだろう。こんなわけわの分からぬ藪で、

わけの分からぬ妖に殺されて、……君がこんにちまで幾年生きたかは知らんが、生きてきた道筋も、積み上げた努力も何もかもを、僕に奪われてしまうんだぞ。

君にツ……礼を言われるのはツ……！ ……おかしいんだつてば……。

おかしいの、分かつてたのに、

僕も、君も、なんて馬鹿馬鹿しい見栄を張つてたんだ。

うう……ぐふツ……グスツ……。

離さないで、手、離さないで……。

やだ、ここにいて、死ぬまでここにいて……消えてしまうまでここにいて。

ひとりにしないで……。

ひとりはもういやだ。いやなの。こわいの。さびしいの。さびしいツ……。

次は……君の話を聴かせてよ……。君が歩んできた人生を教えてよ……。

まだ……猶予はあるから。だから、聴かせて。話をして。

君のこと、君がいなくなつてしまふ前に、もつと、もつと知りたいの……。

#### 4. きっと。

……ありがとう。

こんな僕に……君の、君を語つてくれて、ありがとう。

ひとの世も、辛いものだな。

常に何かに迫われながら、誰かと諍いあらが、競い合い……。

……知らなかつたよ。ひとは身勝手で、なに不自由なく暮らし、好き放題に他者を傷つける、それだけの生き物だと思つてたから。

いや、正確には……ひとというほどとんどがそれなんだろうな。

しかし君のよう、繊細で、やさしくて、ささいなキズが致命傷になるひとも、そいつらの陰に生きてるんだろうね。

今までの僕なら、ただただひとを憎むだけだつたろう。

不幸があるから幸がある。……そんな言葉を、いつか聞いた気がするが、

それと同じだね。

醜いひとがいるから、奇麗なひとがいるつて分かるんだ。

世が奇麗で溢れていたら、それが奇麗かどうか見えぬのだろう。

……君との話は、楽しいな。

僕が知らなかつたこと、気づかなかつたこと。

感情の書冊しょさつをめくるように、次々と頭が満たされてゆく。

こんな時間がずっと続けばいいのに。

それを自ら終わらせてしまつた。アハハハ。笑える笑える。

……スマン。過ぎた傷を撫ぜるのはやめよう。

ひとりはもういやだ。いやなの。こわいの。さびしいの。さびしいツ……。

君と出会つて、僕は……変わつた氣がする。変われたかな。どうかな。ハハ。

んえ？

いま、なんて……？

……、……会つてくれるというのか？ 僕と？

おかしな奴だな。これから君は死ぬのに、どうやつて会おうというのだ。

……本気なの？ ……ん、そうか。うん、……うん。分かつた。

不可能では……ない。

生き物は必ず死ぬ。それだけは避けられぬ結末だが、その結末には先がある。

この世に未練があるのなら。成し遂げたかった何かがあるのなら。

君の肉体は失われても、魂までは消えはせぬ。いわゆる、あの世に行かぬ。

すべての生命は、皆、何かしらの転生なんだ。

まだ生きていきたいという気持ちが、

現世<sup>うつしよ</sup>に魂を留め続け、姿形を変えながら生きるんだ。

ゆえに。

君の言葉が、意志が真実ならば、今ここで死んでも、

靈魂か妖となつて、現世<sup>うつしよ</sup>をさまよい続けるかもしだれぬ。

ただ……転生した君が、どこに生まれるかは分からぬ。

君が、今の君を覚えているかも、君の今までいられるかも、

もしかしたら、理性なき妖になるやもしれぬ。化け物にも怪物にも、

ただ苦しみを吐き出すばかりの、なにかになつてしまふやもしれぬ。

それでも。それでも君は、僕と……再び、会いたいのかい……？

……ああ。不思議だな。君の言うことは、全て真実だと言い切れる。

これが、信頼というやつかね。ハハ。目には見えぬが、確かにあるな。

……ふう。

生涯、目には見えぬものばかりだつた。孤独も、後悔も、像がない。

背後に影が忍び寄り、ずっとずうつと見張られているような、

得体のしれない小さな蟲が、身体を這いずり回るような気持ちの悪さ、  
そればかり感じていたが。

果たして僕は、目には見えぬものに救われてしまった。

……君は……すごいな。とうに四半刻は過ぎたのに、まだそこに立つてゐる。

いや、それとも、僕の毒が弱まつてゐるのだろうか。

どちらにしても、君がそこにいることは喜ばしいよ。

君からは、やはり感じる。生命の声を感じる。

生きていたい。生きていたい。とね。

僕が君を殺してしまうのは、現実。

それはもう否定しないし、目を背けたりしないよ。

でもね……。

そんな身で、こんなことを頼むのはおかしな話だが、僕も、君にまた会いたい。

次に会うときは、格子越しでなく、直に触れさせてくれ。

君の熱を、君の肉体を、……君の手を、このフコヤブの身に感じさせてくれ。

……ん。

ああ、生きる理由ができたよ。今日を生きる意味。明日を生きる意味。

ただ呼吸しているだけでは生きてるとは言えぬ。

この姿で、この意思で、何かを成そうと歩み続けることこそ、  
生きる、というものだね。

あつ……。

……時間だ……。

毒が……身体中を蝕んでしまつたんだ。

ねえ、また……会えるよね？ きっと、きっと、会えるよね？

僕はずっとこの姿だ。この姿で君を待ち続けるよ。いや、こんな祠、

僕の力で破つてやる。なんたつて僕は、恐ろしい蛇の妖、フコヤブなんだから。

君がどこにいたつて、僕は、君に会うんだ。君を探しあててみせるつ。

君がどんな異形の姿になつていたつて、構いやしないさつ。

君にツ……会えるなら、また、こうして話せる、ならツ……！

ツ……グスツ……ああ、あああ、……好き……好きだよ……好き……。

君が見せてくれたもの、やさしさ、言葉、ぜんぶ、僕は受け取つたよ。  
ねえお願ひつ。一度でいい。一度だけ、名前を呼んで。僕の名前を。

お願いつ……。

うんつ、うんつ……ありがとう。ありがとうつ……。

僕と話してくれてありがとう。

僕が生まれてきた意味を、僕を、教えてくれてありがとう。

君を、……君というひとを、教えてくれて……ありがとうつ……。

……さようなら。

いつか、また……必ず。

## 5. それから幾日。

♪ 雨よ止めよと 柳腰  
音無し敷は 暮れなずむ  
否でも応でも 口きかず 待つ天津風 ♪

……ふう〜〜。

ずいぶん遠くまで来てしまったが、ここはどこだろう。

まつたく、藪の中もわけが分からぬが、人里ひとざとのほうも大概だな。

幾年たつても、変わるのは風景ばかり。

歩けばどこかにたどり着くのは、世の理ことわりよ。

しつかし、どこへ行つてもひとにジロジロ見られるし、  
変な男に声は掛けられるし、昔も今も、なんも変わっちゃいねえなあ。

あ、それとも……僕の正体がバレてるのか？ だとしたら現代人やばくね？

……どちらにしても、蔑まされるのは間違いない……。

んうう〜〜でもお、今の僕には、侮蔑の眼差しなんて痛くも痒くもないね。  
なぜなら、愛するひとがいるからだつ。

愛するひとに愛されていれば、それだけで幸せなのだつ。

……しかし、あてもなくさまようのもなあ。途方に暮れてしまうなあ。

ここいらでひとつ、道途に詳しい妖にでも出くわせばいいんだがねえ。  
どうとぬ？ お、このニオイ。噂をすればかな？ クンクン、クンクン。

狐だ。濃厚な狐のニオイ……、  
だが、ンン、なぜだかひとのニオイも混じってる。ということは……。  
ククク。駆け足でどこへゆく狐ちゃん。

少しばかり、「迷い蛇」の相手をしておくれよ。  
このフコヤブのなつ！

(終)